

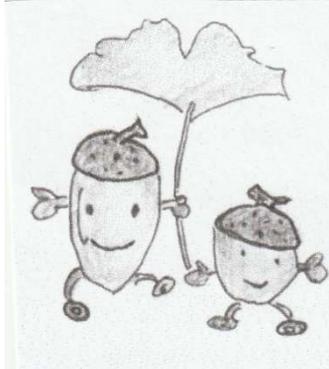
芥川だより

発行日 * 2020年12月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
印刷・発行 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

男のがまん・女のガマン



数年前、東京から山の先輩と奥さんが芥川の店に着物から洋服へ仕立ての注文に来て頂いた事がある。JR 高槻駅から店が分からないから、と電話をもらい急いで駅に向かった。おぼつかない足取りで大きな風呂敷包みを抱え歩いてくる先輩を見つけ、急いで駆けつけ挨拶をしながら包みを受け取った。先輩の奥さんとは初対面であったが、気さくで社交的な感じであった。

店に着き商談を奥さんと家内に任せて先輩を近くの喫茶店に誘った。学生時代から幾度も会ってはいたが、年の離れたエライ先輩なので話をした記憶はあまりない。私は先輩に「初めてです、山の知り合いが注文して頂くのは、しかも遠い東京から来て頂き恐縮です。ところで、先輩は山岳会の集まりに皆勤賞のように毎回参加されますが、どうしてですか?」「いやあ、理由と言うほどの事はないが、とにかく若い時から山岳会の諸先輩に助けられてきたから少しでも恩返しが出来ればと思って…」

話が盛り上がってきた時に、家内が迎えに来た。「もう終わりましたから…奥様がお待ちです」と急かすから話を中断して店に帰った。先輩は次の約束が京都であると急いで帰られた。帰られた後、すぐに家内がおもしろい事を言い出した。「奥さんがね、『あなたの御主人は面白い人で楽しいいでしょう、でもお金には弱いわね』とおっしゃってました」。見事に見透かされた私は愕然とした。笑みを浮かべてる家内を見ながら、先輩には失礼だが「もしかして先輩も、金に弱く奥様のかかあ天下なのかな?」と想像した。

先輩の同期でもある O 先輩も常々「かかあ天下が一番や!」と言っておられる。我が家も我が意に反して、かかあ天下が久しい。私が何か一言でも口答えをすれば、私の数十年前からの罪状をさらけ出されぎゃふんとやられてしまうのが常だ。男のがまんと女のガマンは違う。男のがまんは言いたいことを我慢して口答えをしない事、女のガマンは男が口を滑らして余計な事を言うのを聞き逃さないようにして待つことではないか。

死をめぐるあれやこれ (73)

石川 吾郎

高齢者が菅政権に殺される、ということ

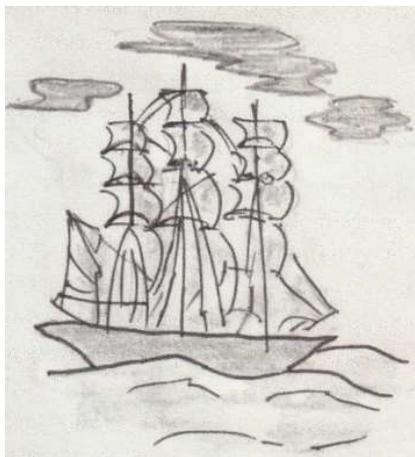
新型コロナウイルスの第三波により、各地で医療崩壊が差し迫った状況になっても、菅政権は狂ったように「ゴーツーラベル」を止めようとしないう。それどころか延長を決めたという。スガ曰く「旅行者がコロナ感染を拡大したというエビデンスはない」と。科学的な常識からすれば、人の移動を奨励すること「ゴーツー」が感染拡大に寄与することは明らかである。医療界からもこの政策を中止せよとの声が大きくなっていく。

そもそも新型コロナウイルス感染者の死亡率は高齢者に圧倒的に多い。高齢者は医療費もかさむし年金も支払いがある。仕事はしないで生産性がないから殺してしまえと政権は考えている。こういう推測は非常に合理性をもっている。そしてこの政策がスガ内閣の目玉政策なのだ。

しかもこのゴーツーは莫大な利権が絡んでいる。自民・二階が旅行業協会の会長、使用する IT システムはスガ友企業、そして主に潤うのが大手の旅行代理店にホテル。そもそもトラベルできるのが経済的に余裕のある国民に限られる。医療や介護関係者やその他のエッセンシャルワーカーはほとんど恩恵をうけない。これだけの大規模な予算を使うならば、もつと補助金を国民に届けるべきだ。

「高齢者が菅政権に殺される」と言うのは冗談ではない。日に日に現実味を帯びてくる。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 73	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 81	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 31	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 37	下村嘉明	6
大人の今昔物語 74	石川吾郎	6
新型コロナウイルス愚考(8) 8	明石幸次郎	7
オクラの山たより 51	因了生	8
隠された歴史 26	満田正賢	14
道をゆく 20	成瀬和之	16
編集後記	S K 生	17
ふみの道草 30	山椒魚	18
俳句	土田裕 影山武司	18



素老人☆よもだ帳 (81)

坂本一光

◆コロナにも自粛はしない虫の声

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもお、ほたるの多く飛びちがいひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫のねなど、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは、いふべきにもあらず、霜のいと白きも、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきづきし。昼にたりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

日本の美しい四季を、清少納言が『枕草子』に綴ったのは千年も前のことだという。彼女は、春の夜明けの美しさや蛍がほかに光り飛ぶ夏の夜の美しさを謳った。また、秋には夕暮れどきの、山に帰り急ぐ鳥の姿や雁の連なって飛ぶ様の美しさを讃え、虫の音や風の音さえも愛でた。冬には雪や霜

の白さにも目を見張っている。

ここには、人の暮らしかや生きものの姿を、自然の変化や季節の移り変わりに重ねて見ようとする意思が感じられる。自然と調和して生きるとは、そういうことなのである。

しかし、蛍がいつ飛び、コオロギがいつ鳴こうと、そんなことはもうどうでもいいのだ、と言わんばかりの事を気象庁が言い出している。十一月十日の気象庁発表によると、季節の進み具合や気候変化をみるために全国の気象台と測候所の五十八地点で一九五三年から職員が続けてきた「生物季節観測」を、来年から大幅に縮小すると言う(表参照、『女性セブン』二〇二〇年十二月十七日号から引用)。

それによると、ホタル、ツバメ、トノサマガエルの初見(目)、ウグイスやいろいろなセミ、エンマコオロギの初鳴(目)など、動物季節観測の二十三種二十四項目をすべて廃止。一方、三十四種四十一項目ある植物季節観測は、チューリップやタンポポの開花など二十八種三十二項目の観測をやめ、アジサイの開花、イチヨウの黄葉・落葉、サクラの開花・満開など六種九項目だけにするとする。『女性セブン』は伝える。

『こんなことをしたら、四季の移り変わりを感じられなくなってしまう』

テレビでおなじみの気象予報士・森田正光さんがそう危惧するのは、気象庁が発表

した「生物季節観測の見直し」に関するニュースだ。:

観測対象	観測有無	観測対象	観測有無	観測対象	観測有無
あじさい開花	○	すみれ開花	×	くませみ初鳴	×
あんず開花	×	たんぽぽ開花	×	さしほ南下初見	×
あんず満開	×	チューリップ開花	×	しからとんほ初見	×
いちよう発芽	×	つばき開花	×	つくつくほし初鳴	×
いちよう黄葉	○	いでい開花	×	つばめ初見	×
いちよう落葉	○	てっぽうゆり開花	×	どかげ初見	×
うめ開花	○	なし開花	×	とのさまがえる初見	×
かえで紅葉	○	のだぶじ開花	×	ににいぜみ初鳴	×
かえで落葉	○	ひがんざくら開花	×	にんあまがえる初見	×
かき開花	×	ひがんざくら満開	×	にほんあまがえる初見	×
からまつ発芽	×	ひがんばな開花	×	はるぜみ初鳴	×
ききょう開花	×	もも開花	×	ひぐらし初鳴	×
くり開花	×	やまつし開花	×	ひばり初鳴	×
くわばら	×	やまはる開花	×	ほたる初見	×
くわばら	×	やまぶき開花	×	みんみんせみ初鳴	×
ざくら開花	○	ライラック開花	×	もず初鳴	×
ざくら満開	○	りんご開花	×	もんしんちよう初見	×
ざざんか開花	×	あきあかね初見	×		
ささすべり開花	×	あぶらせみ初鳴	×		
しだれやなぎ発芽	×	うぐいす初鳴	×		
しば発芽	×	えんまこおろぎ初鳴	×		
しろつめくさ開花	×	かつこう初鳴	×		
すいせん開花	×	きあけほ初見	×		
すすき開花	○	くさせみ初鳴	×		

「見直しそのものは仕方のないことですが、二十三種類ある動物観測をすべて廃止することには違和感がある。植物も六種類しか残らず、…大削減です。季節観測の目的は、動物や植物の定点観測から、自然や環境の変化や人間の営みとの関係を読み取ることに。こうした試みは、温度計や湿度計など観測器では測れない貴重なもののはずです」(森田さん)

森田さんが懸念するのは、これにより日本全体から季節感が喪失するのではないかということだ。

「生物季節観測のデータはテレビ局に提供されて、『○○で桜が開花しました』『○○でツクツクホウシが初めて鳴きました』などとニュースで映像とともに紹介されます。気温が1℃上がったことを伝え

るより、生物や植物を通じた方が視聴者にわかりやすく伝わる。こうしたニュースによって四季の訪れを感じている人も多い。これがなくなったら、花鳥風月を愛する日本人の美意識も喪失するのではないかと怖くなります」（森田さん）

なぜ気象庁は大リストラに踏み切るのか。気象庁観測整備計画課の担当者はこう説明する。

「そもそも季節観測は十〜二十年に一度のペースで見直しており、人員削減や予算がらみの処置ではありません。動物については、気象台の周辺の生息数が減ってきたことが理由として挙げられます。

また、ここ二十年で気候が大きく変動し、動物や植物が初めて鳴いたり現れたことを観測できた時点で、すでに季節が移り変わっているケースが目立つようになった。観測から四季の移り変わりを読み取れなくなったことも、今回の見直しの要因です」

つまり、「ホーホケキョ」とうぐいすが鳴いたからといって、それが春の訪れを示すのではなくったということ。通常ならば暖かい年は早く鳴き、寒い年は遅く鳴くはずだが、個体数の減少により、初鳴きを観測したときには、すでに春が到来しているケースが増えたというのだ。だが森田さんは、観測が難しくなったことと、観測をやめることは別の話だと指摘する。

「いちばんの問題は観測を廃止すると、これまで六十七年間積み重ねてきたデータが無意味になるということ。一度やめてし

まえば気象現象が自然現象にどう影響を与えたかを検証できず、動植物が長期間でどう推移したかも把握できなくなります。

例えば、いまは都市周辺で見られなくなったトノサマガエルは、ずっと観測を続けていたからこそ、都市化の影響で姿を消したと判断できたのです。これまでに培った観測データは未来へのバトンなのです」

国立環境研究所生態リスク評価・対策研究室長の五箇公一さんも「観測は続けるべき」との意見だ。

「もともとの目的は季節の移り変わりの把握だったとしても、いまは環境モニタリングとして大きな意味がある。本来いるものがないことには大きな意味があるので、『鳴き声が聞こえない』『姿が見えない』ことも定点観測して記録しておくべきです。気象庁で難しければ環境省が引き継いでもいいので、貴重なデータ収集を継続することが望ましい」（五箇さん）」

気象庁は、見直しは以前から行っていて、人員削減や予算がらみの処置ではないと言っている。しかし、その人員は最も多かった時の約六六〇〇名から約一五〇〇名も削減されているとのこと。また、今は中止している枠組みだけの表示になっているが、ホームページに民間広告を掲載して「国民の安全安心を優先すべきトップページに民間広告か」と問題にもなった。国民の声を一切聞かず、乱暴に事を進めるアベ・スガ政治の影はこんなところまで差すよう

になったのだろうか。
（かたちは心であり、心はかたちになる ■
大分の素老人）

哲学爺いの時事放談（31）

祖蔵 哲

ワクチンの哲学く分配の倫理

毎月、本記事の原稿を書き上げるのは締め切り間際になってしまふ。日頃はさまざまなジャンルの本や資料を読んでその月のテーマを探し書き始めるのである

が、どうも締め切り間際でないとなかなか内容が集中してまとめられない。なぜなのか、編集者に原稿送付が遅れる言い訳を考えているうちに気になる説を発見した。かの有名な英国の政治学者、パーキンソンが提出した有名な法則「役人の数は、仕事の量とは無関係に増え続ける」

の元になった第一法則『仕事の量は、完成のために与えられた時間をすべて満たすまで膨張する。』に関係があるらしい。すなわち、役所の仕事量は本来あるやるべき仕事の量で決定されるのではなく「役人の数」に合わせて作りだされるという理屈。これが「締め切り」との関係

で「締め切り効果」として応用されているという。どういう意味で、それが私の

場合の現行遅れの「言い訳」になるかという、少々複雑であるがこうである。

つまり、記事の「仕事量」は期限内の全時間の総量で決まっています、すなわち早く始めてもだんだんして密度が下がるだけで結果的には、遅く締め切り間際に始めると密度があがり効率的に仕事はかどるといふ理屈である。わかりやすく言うと、締め切り前になると焦って集中力が高まり、結果的に早く始めるのと同じ結果を出せるという「理屈」で「言い訳」である。しかし私の場合、今月は締め切りを過ぎてしまった。この場合、屁理屈の「言い訳」を書いている場合でなくまず「謝罪」が適切である。

さて、もう今年も年末12月である。中国の湖北省武漢で最初に確認された新型コロナウイルスの感染者が発症したとされる日が去年の12月8日であり、今年が経過したことになる。考えてみれば、今年が新型コロナウイルスで始まり新型コロナウイルスで終わる。いや新型コロナウイルスはまだ続くが、これだけ長く「生命の危機」が継続するのは「戦争」という状況以外にはない。その意味で現在は「戦時中」といえるのか。戦争であれば「敵と味方」に分類される。それでは敵はウイルスであるのか。果たして我々は「見えない敵」と戦わねばならないのか。だとしたら終りがあるのか。このテーマを今年はずっと哲学してきた。期しくも去年の新型コロナウイルス発生確認と同じ12月8日、今月8日、世界で初め

て使用を許可されたワクチンの接種がイギリスで開始された。接種を受けたのは、間もなく91歳になる女性である。イギリスでは今後数週間で重症化リスクの高い高齢者のほか、介護施設の職員などを中心に、およそ80万人がワクチンを接種する見通らしい。ただし、ワクチン接種は義務化されていない。新型コロナウイルス感染者は世界全体で6、600万人になり死亡者は150万人を超えた。感染者の多い国はアメリカ、インド、ブラジルである。それらの国がとっている感染にたいする政治的対策、対応がその数と関係があるのかどうかは確認されていないが、共通するのはポピュリズムであり相関はありそうである。そして、またワクチンという新たな対策が論議を呼び起こしそうである。今月はこのワクチンについて哲学してみる。

(1) ワクチンとは何か。「予防と治療」

“乳搾りの女性は決して天然痘にかからない”18世紀末、種痘法を発明した英国の医師ジェンナーが注目したのは、乳搾りの女“牝牛”の意のラテン語に由来しているという。ワクチンを元気なときに接種することによって、免疫を作り、感染症などにかかることや重症化することを予防する。病気に罹ってから投与する治療薬とは異なる。ワクチンは感染症予防において最も重要かつ効率的な手段

であり、世界各国でワクチンの予防接種が行われている。ワクチンはとくに抗生物質の効かないウイルス性の感染症に効果がある上、細菌性の感染症で増大している薬剤耐性菌への対策の関係上、予防医学において特に重視されている。予防は感染者の治療よりも費用対効果が高いため、ワクチンで予防できる病気はワクチンで予防することが望ましいとされている。

つまり、病気の源である病原菌に対する対策は、病原菌自体を殺すことであるが、その役割を人間が備えている免疫力によって行うのである。それを罹る前に「予防」にするのか、罹ってから「治療」するのかの違いである。そして「予防」としてのワクチンの効果は抗体を作つて、感染を防ぐということと、もし感染症が発症しても重症化を防ぐこと、そして病原体を周囲に拡散するリスクを下げることができるというものである。すなわちワクチンによる「予防」の方が「治療」よりも効果が高いことからその開発が「期待」されるのである。

(2) 医療資源としてのワクチン

無謀なGOTOキャンペーンの効果かどうか、日本でも感染者が急激に増加している。そこで問題になるのがいわゆる「医療崩壊」である。重症患者を受けられる病院などの「医療体制」問題である。その体制内容は施設(ベット数)、医療要

員(医師、看護師、医療技師)、医療機器、そして医薬品などである。これらを「医療資源」としてみるときにその限界が設定される。その資源が限界を超えるときに「医療崩壊」が起こるのである。

この「医療資源」はそもそも「医療体制」だけではない。この「医療資源」は一步引きさがつてもう少し大きな目でみると、国としての「国家予算資源」のなかの「医療予算」ということになる。当然ながらこの予算は「有限」である。そもそも「国家予算」自体が有限であるのであるから。国家予算は建設、教育、福祉、国防など様々な配分先を抱えている。そこでこの国の予算がどれだけ「医療」に「配分」されなければならないのかが大きな議論となる。「規模」や「優先順位」に関する「配分問題」である。さらに医療分野内での配分問題もある。例えば成人病、ガンなどの病気の種類、または予防か事後治療かの配分もある。

さて、このように「有限な資源」を「投入」「配分」するとき求められるのはその「効率性」である。なるべく資源の無駄遣いは避けるといふ意味の「効率性」である。効率とは数字で表すことができる。すなわち効率＝結果・効果／投入費である。投入費が決定した後の「結果」が求められるわけである。その投入「結果」が「価値」を持つかどうかである。そして、話題のワクチンも予防医療として「医療資源」であるかぎり、その「有限的資

源」の「配分問題」には「優先順位」と「効率化の結果」が問われる。

(3) ワクチン／分配の倫理的価値問題

新型コロナウイルスに対するワクチンの期待は大きい。ワクチンの開発は通常には数年を必要とするが、今回、世界に最初に大規模投与されるものは異例の速さで作られた。それだけにその効果や副作用は実用段階では未定であるが期待値だけは大きい。オリムピックをはじめ経済活動の本格再開はこれ待っている。それだけにどの国がより早く、より多くワクチンを確認するのが競争となっている。また、ワクチンナショナリズムという自国中心主義もまかり通っているのが現状だ。現実的には、ワクチン開発時にはその副作用の有無を調べるために開発途上国や貧困層に臨床試験の負担を強いており自国中心主義は「倫理」面からの問題も問われる。その「倫理」という問題からみると「資源の配分問題」には「公平性」が求められるということになる。

すなわち、先の「有限的資源配分問題」の「優先順位(公平性)倫理」と効率化の結果(価値)は、「倫理的価値」の問題と読み替えられる。

(4) 「結果主義」:「最大救命原則」と「社会秩序原則」による配分

さて、医療の最大目的は「救命」である。そして最も多くの命を救うことが

「結果」すなわち「結果価値」を最も大きくすることができると。「この「結果価値」を最大にしようという考えは「功利主義」と呼ばれる。

ベンサム功利主義は、古典的功利主義とも呼ばれ、個人の効用を総て足し合わせたものを最大化することを重視するものであり、総和主義とも呼ばれる。「最大多数の最大幸福」と呼ばれることもあるが、正確には「最大幸福」である。この幸福が医療の場合「救命」である。「功利主義」はその意義や経過よりも「結果を重視」するため「結果主義」と言い換えが可能である。

では、そのための配分の「優先性」とは何であろうか。この場合は直接に命を救う業務に携わっている医療従事者や医薬品開発者、そして重症化、死亡リスクの高い人々の順になる。これが『最大救命原則』である。しかしこれにも問題がある、どこまでが医療関係従事といえるのかである。その家族や施設の保全、そして交通機関を運営する人々まで範囲が広がる。

そこでもう一方の原則がでてくる、直接的な救命医療ではなく、その「結果価値」を社会全体の利益におく『社会秩序原則』である。これは直接的個々人の生命維持ではなく社会全体における人間の生命活動、すなわち日常生活維持価値に重点を置く考えである。これによるといわゆる「エッセンシャルオイル・ワーカ

ー」と呼ばれる公共サービスや社会インフラ、保育や介護従事者を優先にするということである。しかしこれにも問題がある。そもそも「社会に必要な職業と必要な職業」という区別があるのかどうか。またそれは「差別」につながるのではという懸念である。

(5)「非現在・結果主義」による配分
「世代間ライフサイクル」

「功利主義」すなわち「結果主義」は「結果」を重視するためにその過程における「公平性」における「倫理性」が議論されることが少ない。いわゆる「結果オーライ」である。しかし、その「結果」にも問題がある。それはその結果をどの時点での誰が享受するのかということである。功利主義の結果の享受は比較的狭い範囲で設定されることが多い。すなわち「将来」を含まない「現在結果主義」である。社会全体の利益が最大になったところでそれを受け取れるひとの時間的な幅の「公平性」は守られるのかどうか、利益を受け取る世代はどこまでなのかという時間的な問題もある。例えば限られた数のワクチン投与については、死亡リスクの高い老年層を優先にするのか、それとも将来の可能性をより多く持つ若年層を優先にするのかという『ライフサイクル原則』の問題である。これは世代間の「機会の平等」という意味の倫理的公平性でもある。老人の命を見捨てるのか

という議論もあるが、日常的には「若者の死」の方がより感情的な悲愴さをともない納得感はある。しかしやはりこれにも高齢者の生命には価値がないように受け止められてしまい問題は多い。

(4)「分配方法」の決定に関する問題
誰が決めるのか

さて、ここまででワクチンの「配分方法の問題」を見てきたが、その前にそもそも配分方法をどのようにして決めるのかという「決定の方法の問題」がある。すなわち「話し合いで決めるのか」(合議)、「リーダーシップ」(単独)「多数決」(民主主義)である。決定の意志に参加する人数が多ければ多いほど「話し合いによる決定」は結論がでない。そして「リーダーシップ」による決定は衆智が集まりにくく誤った判断になりやすく独裁を招く恐れがある。そして現在より理想とされている「民主主義」も「少数の切り捨てや犠牲」を生み「格差社会」が問題となっている。

広い意味での哲学は大きく2つに分けることができる。理論哲学と実践哲学だ。普段この「爺い」が話していることは前者の哲学で「真理はあるのか」「世界はどうなっているのか」「時間とは何か」とか「神や魂は存在するのか」といった、通常私たちが経験できないことを「概念化」して物事の本質を探究している。一

方、後者の実践哲学は人間の行為(実践)に関わることを扱う。それは人間が単独で生きるものではなく他者とともに生きているため、「行為」するときには必ず他者との関係そして全体としての人間社会また自然とのかかわりがでてくるからだ。「人間は何を為すべきか」「人はどう生きるべきか」「人間が従うべき規範は何か」「善悪とは」など自己が思考して自分のために行為することが他者とのように対立回避し調和できるのか。それらを判別する基準は何か、そもそもなぜそのような行為をしなければならぬのか、などなどについて考えていくのが実践哲学であり、「倫理」ともいわれる。だから「倫理」は「哲学」である。「ウィルスの哲学」から「ワクチンの哲学」はより「実践的問題」になる。来年も引き続き「哲学」しよう。



下村嘉明

楽に山登りをしたければ、山登りで鍛えるしかない。平地で幾ら歩いたり走ったりしても山登りのそれとは違う。使う筋肉が少し違うらしい。しかし、体重を減らせば自然と楽に登れるのも事実だ。マラソン選手ではないが、体重は極めて重要な要因である。適度な体重管理はどうしても越えなければいけない課題であるが難しい問題だ。

贅沢な話ではあるが、食いすぎで体重が増え過ぎることは簡単にできるが、減量はかなり難しい。中には若い時から体重が変わらず一定という人もいる。羨ましい限りだが普通の人は肥満の恐れを持つてそれなりに努力している。

私は、大量のステロイドを服用したことでステロイド性糖尿病と医者から言われている。投薬は無いから大したことはないのだが、HbA1cが一時期、7.2だった。今では6.6に改善したので一安心といった感じである。しかし、油断するとすぐに高くなるから常に気をつけている。筋肉が破壊されるという不思議な病・難病を抱えているので、運動しないと筋肉が固くなるような気がして運動を生活の一部にするような日々を十年近く続けている。あれやこれやと考えても分からないことが多く、一番の薬は運動だと考えている。

私の運動は果てしないリハビリである。長年続けていると確かに効果はある。10年前には百キロ近くあった体重が今は七十キロになった。その他血液検査の数値もかなり改善し人並みになった。やはり運動は私にとっては一番の薬だったのだ。

特に、六甲山に登る事で平衡感覚が戻り体のバランス感覚が良くなった。平地を歩く運動と違い急な山道を歩くことで体の全神経・全筋肉を無意識に使うことにより鍛えられたのだと思う。山登りの効用は言うまでもなく精神的な効果が大きい。日頃の生活で溜まったストレスを発散させる自然の癒し効果は何物にも代えがたい。

山を急いで登る必要はないのだが、ある程度の速さには必要だ。六甲山は低山で難しい山ではないがルートによれば危険な箇所もある。全山縦走路を歩いていれば死に至るような事故は起こりにくい。よほど道に迷うか、急な病にならない限り大丈夫だ。

11月末の日曜日、婆さんをショートステイにお願いして六甲山にいつものように宝塚から登った。前回の時には調子よく登れたので、今回もゆっくりと歩く予定で歩き始めた。前方に独り中年の男性が歩いていたので10mばかり距離をとって歩くことにした。登る姿勢は悪いがなかなか早い。急な塩尾寺までの坂を45分ほどで登った後、男性が寺のベンチ

で休憩したが、私は休まず縦走路を登って行った。すると間もなくして、また先行する中年の男性を見かける。彼もなかなか早い調子で登っていく。私もつられて後を追う。大平山あたりから数名のパーティーを追い越し、道端に「山に登る会」の標識が置かれている。標識には触らないでください。後で回収します、と書かれていた。

私は、何の会かは知らないが、何かの催しが行われているのだと思った。それから幾人かを追い抜きかなり高齢な爺様の後についていた。この爺様も山に登る会のタグをリュックに着けていた。簡単に追いつくとしても、距離が詰まらない。ゆっくりそうに見えるのだが結構早い。お

分ばかりして爺様は休憩をとられたので追い越して先を急ぐ。私の目標地点の国道との分岐点(標高840m、宝塚から10km)で山に登る会のタグをつけた数人に追いついたので声をかけた。「山に登る会はどんな会なんですか?」70過ぎと思える爺さんが「会則も会費も無い、予約もなく参加したい時に集合場所に行つて登る会です。リーダーは早く登るが、アンカーは1〜3時間遅く歩いて標識を回収してくるから、参加者はその間から自由に自分のペースで歩けます。毎週いろんなコースを歩き、毎回80人ほどの参加がある。」

説明を聞いて、なるほど上手い方法を考えたもんだと驚いた。会も数名のリー

ダーで交代しながらコースを決め保険なども無しの自己責任で参加する方式だ。参加費の300円も安い。気楽に参加できる会だ。一味も二味も違うコースが売り物で初参加でも気楽に話しかけられる雰囲気なのだろう。調べてみると歴史は長い。リーダーさんたちの負担も少ない、独りで登るよりも違った山を歩けたり話友達も出来て面白い。すばらしい会だ。

大人の今昔物語 (74)

石川 吾郎

今回は、京都市の西郊にある、昔から愛宕信仰で有名な愛宕山を舞台にした話教科書に出ない度は一／五。

愛宕山の聖人、草猪(くさいなぎ)に騙される話(巻第二十 第十三)

今は昔、愛宕の山に籠り修行をする一人の聖人があった。長年法華経の誦経に専念して、宿坊の外に出ることもなく過ごしていた。ただこの聖人、知恵はなくその経の内容を学ばなかった。

一方、その山の西の方に一人の獵師が住んでいた。鹿や猪を射殺することを生業(なりわい)としていた。しかしながら

この獵師、この聖人への信仰あつく、常日頃自分から聖人のもとにでむき、折々にしかるべき供物などを寄進していた。

あるとき獵師は、久しくこの聖人のもとを訪れていなかったたので、餌袋に果物や木の実などを詰め、これを携えて詣でた。聖人はこれをたいそう喜び、ながらく会わなかった間のことなどを話すうちに、突然聖人が獵師の方にじり寄って言うに「このごろ、ほんに尊いことが起こっておる。わしが長年、法華経を誦経させてもろてるそのおしるしじやろうか、近頃夜な夜な普賢菩薩のお姿が現れなされるのじや。おまえさまも、今夜はぜひ夜まで留まり、拝みもうされ」と。獵師「それは尊いことでございます。ぜひ夜まで居らせてもろて、拝ませてもらいましょ」と、その夜は聖人の宿坊にとどまった。

そうする間に、この獵師が聖人の弟子の幼い童に問うに、「聖人さまが普賢菩薩さまが現れたまうと言われとおる。お前さんもその普賢さまのお姿を拝見したかえ」童「拝見しました。五六度は見させてもろてます」と答えるので、獵師が思うに「それではわしも拝むことができるかもしれない」と思い、獵師は聖人の後ろに控えて、不寝の番をしていた。

季節は九月二十日すぎのことだったたので、夜が一年で最も長い。今か今かと待つうちに、夜中が過ぎたであろうかというころになり、東から月が出てくるように、

峰の端が明るくなってくる。峰の嵐がさつと吹き払うように、この坊の中に月の光が差し込んだかともまがうほど明るくなった。見ると白い色の菩薩が白象に乗り、ゆつくりと降りてこられる。このお姿はまことに尊くありがたい。菩薩は近寄られ、僧坊の正面にお立ちになった。

聖人は感涙にむせんで礼拝し、後ろにいる獵師に言う「どうじや。おまえさんは拝んでおるか」と。獵師「拝ませてもらてます」と答え、一方、心のうちで思うに「聖人さまの、長年法華経に帰依された目に見えるのは、それはもつともなこと。だがこの童やわしのような、経も知らぬ不信心な者の目にも、このようにお姿を現せられる、というのはどうも怪しいことだ。これを本物か試させてもらうのは、信心を深めるためゆえ、罪にはならんだろう」と思い、鋭い矢じりを付けた矢を弓に番えて、聖人が礼拝して低く伏している上から、弓を強く引いて射る。

その矢は菩薩の胸の部分に当たると、たちまち火が消えたように光も消え去った。さらに谷の方に地響きをたてて逃げていく音がする。

そのとき聖人「これは何としたことをするんじや」と言い、泣き叫び混乱すること、はなはだしい。

獵師の曰く「お静かに。何とも納得できず、どうも怪しいと思われましたので、試してみようと矢を射たのでございます。

さらさら聖人さまの罪にはならんこと」と丁寧になだめすかすが、聖人の悲しむことは止まらない。

夜が明けて、菩薩のお立ちになった場所に行ってみると、血がべつとりと流れている。その血痕をたどっていくと、一町ばかり山を下ると、谷底に大きな野猪（くさいなぎ）が、胸から背中に尖り矢に射抜かれて死んでいた。聖人はこれを見て、悲しみの心はすっかり醒めてしまった。

そんなわけで、聖人といえども、知恵のない者はこのように騙されるものだ。もつぱら獣を殺し罪をつくる獵師といえども、思慮深ければ、このように野猪を射殺し化けの皮をはがすことができる。

このような獣は、こんなふうには人を騙すことをするものである。こうして命を落とす、益のないことだと語り伝えられているとか。

《コメント》

京都市の西にひと際高くそびえる愛宕山は、頂上に愛宕神社をいただき、古来より信仰の山です。現在でも、火の神として護符「火の用心」が、台所に貼ってある飲食店や家庭は多いようです。今回はその愛宕山を舞台にしたエピソード。

愛宕信仰の昔は、今の時代では想像できないほど盛んだったようで、それは第二次世界大戦の時代に至るまで続いている

たようです。

私はこの数年、愛宕神社に初もうでにと登山をしています。その登山道にはケーブルカーの路線跡（このレールは戦争末期に金属供出のために撤去されたとか）や山頂付近には廢墟となった山頂駅やホテルの跡などがあることを知り、かつての愛宕山の賑わいぶりに驚きました。また清滝からの参道の登山道は、昔からの茶店の跡など、まさに戦前までの盛んな参詣の面影を見ることができなのです。それに比べると、こういった、かつての観光施設などを「遺跡」のようにしか見ることのできない現在の衰退ぶりには、強い感慨を感じてしまいます。

これは、日本という我々の国の二十年後の姿を、凝縮しているのではないのかと。

新型コロナウイルス禍愚考（その8）

明石 幸次郎

人は成長する過程で悩んだり、苦しんだりして、生きてきたので、中高年になると若い人に比べて、生きてきた時間が長いだけに自分の人生経験は豊富だと自己評価をしがちです。特に男性は！

それで、私のこの豊か度？しんどかった今までの「B級人生経験」を生かして、何か人の役に立ちたいと「いのちの電話」の相談員になって六年目になります。

その電話相談で分ったことは、自分の人生経験で相談者の役に立てる部分は本当に微々たるものだと言います。特に男は駄目ですね。中高年のおっちゃんよりは、同じ年配のおばちゃんの方が、相談者の電話を聴くということについては、数段上を行くし、適任とも言えますね。

それは、私なりに考えたと以前も書きました。男性は今起こっている問題を解決し、他者から目に見える評価をされる事に重きにおいて学校、会社、役所といった組織で争ってきた経験が長いのです。

それで、相談者に対しても、意識して聴くことよりも、ついつい助言とか、解決策とおぼしきことを、言ってしまうがちです。それは、掛け手の相談者にとっては、聴いてもらっていると、助言をしてもらっていると、お互いの立場が何かしら、上下関係になってしまいます。それは、相談者によっては、不快に感じて、この相談員と話しても、自分のしんどさなんか、分かってくれない、共感すらしてくれないと敏感に感じて、電話を切ってしまうこともあります。

それに比べ、女性は、伴侶の相手、子育て、子供の教育、親の介護、家事、近所、親族との付き合い等々は目に見えて評価が難しく、それらの心情的で多様な

生きるための雑事行為を出来るだけ争うことを抑制し、上手くやって来たという経験と自信が、男性の豊かな？人生経験より、相談に生かされているようです。

女性は聴く能力が高く、助言とかは、余りしなくても、「うん、うんと、そう、大変やね〜」という声と共感する力で、相談者は優しく母親に聴いてもらっているような感じで、思いつめた気持ちが癒やされたり、楽になったりされるようです。

特に女性のほんわかするような関西弁は、声だけで繋がっている相手にとっては、それだけでも、自分が受け入れられているような気持ちに特に東の方から掛けてこられる相談者はなられるようです。

相談員の男女の比率も男性…女性が3…7とか2…8に現れています。

又、女性は本能的に小さなことでも人に親切にしようという、良き隣人になっ

ていている人が多いし、それが出来る自分が素直に嬉しいと思えるんですね。それで、女性相談員は、何十年と続けている人が多く、いのちの電話の様な究極的なボランティア組織を支えているのは、当にこの女性の力です。

しかし、私の様な少数のB級相談員の男も、真剣に聴くことの難しさを感じながらカウンセリングの泰斗の河合隼雄先生が言われた「悩みをただ受け止めて聞いてくれる人がそばにいた、というだけで、その人は自分自身のちからで立ち直っていたりします。ひとりで悩んでいると、

どうしても同じところを堂々巡りしがちです。その堂々巡りから抜け出そうとする時、ただ受け止めてくれる人との出会いが大切な働きをするわけです。悩み事の相談というのは、意見をのべるとか、なんらかの援助、助言をするとか、そういう行為や行動をイメージしがちですが、ただ聞くという一見何でもないようなことの方が重要だったりします。それにしても聞くことは、難しいことです」と、

今からわからぬが、もとより蕪村ほどの名譽も得なかつたと思はれる。まして蓼太のやうにもてはやされぬことは確かである。さて太祇の腕前は如何にといふに蕪村の天才に及ばぬことはいふまでもないけれど、蕪村を除けば天下敵なしである。蓼太などは爪の垢でもない。しかし世の中はいつでも蓼太みたような奴が跋扈(ぼつこ)するものときまつているから、それに不思議はない。太祇もまさか蓼太の榮華をうらやむ程の愚痴な男でもなかつたらう。けれども其の死後にあれほどまで其の名が沈んでしまふとはよもや待ち設けなんだであろう。蓼太は死んでも相応に名を売っている。…中略…けれど太祇といふ俳人が何時出て何処にいてどんな句を作つたかはほとんど知つていないものがないといふ有様である。氣の毒なのは太祇だ。

オクラの山たより(51)

困了生

一

一八九七(明治三十二年)三月、正岡子規は句誌「ホトトギス」で「俳人太祇」を発表しました。次に示すのはその中の一節。いつもながら小気味のよい文章です。

太祇が生前どれ程の名譽を得たかは

この子規の評論が発表されて百年以上経つのですが、炭太祇(たんだいぎ 一七〇九〜一七七二)の名はいまだ一般には知られていません。子規によれば蕪村に次ぐ俳人ということになるのですが、天明期の俳壇といった特殊な講義でもない限り学校の文学史にあつて取り上げられることはまずないでしょう。しかし京の蕪村を見ていく上ではまずこのできない人物であるのは間違いないと思います。今回はこの炭太祇を取り上げようと思いま

す。

ただ、太祇について記す前に子規から「蓼太みたような奴」といわれている大島蓼太（一七一八〜一七八七）を通じて蕪村と太祇を取り巻いている俳壇の雰囲気を見てみることにします。

京で蕪村が句作りに励んでいた頃、俳諧の世界では俳壇の革新を唱え「芭蕉に復帰せよ」という声が高まりました。その声に乗じて時代の寵児となったのが江戸の大島蓼太です。

大島蓼太は信州伊那郡の人。芭蕉の高弟服部嵐雪の雪中庵をついだ吏登に師事してついにはその三世を継ぎました。それ以来、江戸の俳壇にあつて嵐雪の流れの興隆に努め、ついに門弟三千人に余ると称せられ、編集した撰著は二百冊以上に及ぶと言われています。蕪村の死後、刊行された「蕪村句集」に蓼太は序文を寄せ「旧識五十余年」と記したように江戸にいた頃の青年蕪村の旧友でもありました。彼は京で出された蕪村一門の「あけからず」などの「蕪村七部集」にも句を寄せていますから、蕪村との交流はずっと続いていたのでしょう。

しかし、蕪村とは違い蓼太は元来高踏的な詩人肌ではなく、実的な事業家タイプの人でした。一生の間、東西の吟行数十度に及んだといっても、一蓑一笠の姿で山水の間に吟魂を練ろうというのではなく、駕籠に乗り供を連れ、到る所で歓迎の宴を張られ盛大な句会を催すあり

さまでした。

其角の流れに対抗する策として「芭蕉に帰れ」と声高に叫びましたが、その生活は芭蕉の質素な隠棲からは想像するところでもない売れっ子スターのそれであり、その指導精神として芭蕉を説きながらも、努めて大衆に迎合することを忘れませんでした。蕉風復古の名のもとに平易通俗な句風を広めていったのです。

もちろん蕪村も芭蕉、そして其角を敬愛すること人後に落ちるものではありませんでした。しかし、蕪村にとつて重要なことは芭蕉の俳風をまねることではなく芭蕉の「詩の精神」とでもいうべきものを継ぐことでした。ですから大衆に蕉風の俳諧を広めんがために「俗語平話」を旨とした作風をすすめる、その過熱ぶりによつて「蕉風」と称する俳諧が卑俗化していくことには苦々しい思いをしていました。

その卑俗化の一端を大島蓼太のよく知られた句によつて見てみましょう。

- ① むつとして 戻れば庭に 柳かな
- ② 世の中は 三日みぬ間に 桜かな
- ③ 五月雨や 或る夜ひそかに 松の月
- ④ 鳥遠うして 高欄に 牡丹かな
- ⑤ 岩鼻の 鷲吹きはなつ 野分かな

①の句は柳の無抵抗主義にならうべきことを示し、②の句は世の転変常なきことを教えています。そのため教訓臭い句

になつていて、分かりやすいのですが、作者の感動が今一つ伝わってきません。

③の句は降り続く五月雨（梅雨）に月の姿を見ぬことも幾夜になることか。ある夜、ふと見上げた松の木の中に予想もしなかつた月の姿を見出した、という句意です。雨の晴れ間にこつそりと姿を見せた月を「ひそかに」と擬人法を用いた表現の巧みさがこの句のミソでしょう。

しかし、技巧ががちすぎて、作者の実感からきた表現とはいえず、素直に共感することができません。小細工が過ぎるといふべきでしょうか。ただ、この巧妙な技巧の使いぶりが一般の俳諧愛好者を感じさせたのでしょうか。

こうしたことは⑤の句にもいえます。わかりやすい句で平易通俗な句ですが蓼太が俳諧初心者たちを導くためのお手本として、この句は適切であつたでしょうが、ただ「吹きはなつ」という大げさでわざとらしい表現が気になります。芸術的に高い評価を受ける句とも思えませんが、しかし広く大衆をうならせ俳諧愛好者を増やしていくためにはこうした大衆受けのする表現が都合よかつたのでしよう。

④の句は「高欄」「牡丹」と中華趣味の語を使った作品です。「漢詩漢文好きの蕪村がやるなら、なかに、オレにだつて中華趣味の句なんぞ、簡単にできるさ。」といった心意気を示したかつたのでしよう。美しい牡丹が置かれている高

楼の上で主人と客とが詩のやりとりでもしているような情景が想像できます。そして主客二人の背景には広々とした空間と清らかな大気存在までも感じられそうです。しかし、結局はこの句が「高欄」「牡丹」という言葉をポンポンと置いただけで成立しているために、どことなく空虚な印象しか残りません。広大な空間をとらえることでは名人芸を持つ蕪村の句

「方百里 雨雲よせぬ 牡丹かな

「新花摘」

の見事さに比較すれば、その優劣は明らかです。さすが蕪村です。

二

さて、話を炭太祇にもどします。彼は江戸生まれ。吉原の角町（すみちよう）に住んでいたことから「炭」と称するようになりました。一七五一（宝暦元）年に京にやつて来て、はじめ大徳寺の真珠庵に住んで法名を道源と称し、しばらくは九州にも江戸にも行きましたが、宝暦三年、四十五歳の時に島原に移りました。太祇の住居は不夜庵と号し島原の東端にあつた上之町の西側角の桔梗屋治助の隣にありました。桔梗屋治助は俳号を吞獅といい、太祇がここに居を定めたのは彼の取り計らいと考えられます。

太祇の住居を不夜庵というのは島原を

不夜城と俗にいうところからの号でしようが、立派な建物というのではなくて、

逆に貧弱な、風呂場もないような小家であつたらしいのです。ある時雨の降る頃に太祇が寒さに震えていると、隣から桔梗屋の呑獅が湯風呂を沸かして若い者にかつがせて運んでよこした、という話も残っているくらいですから。

この不夜庵で太祇は俳諧の師匠として生活したのですが、能書家でもあつたので、手習いの師匠、つまり寺子屋のお師匠さんのような仕事もしていました。太祇の性格はきわめて温和であり、誰とも争うことなく交わつた人でした。

自然、太祇のまわりには多くの大人や子供がやってきます。太祇は島原の子どもたちや遊女たちに手習いや俳諧を教えたり、角屋の中川徳右衛門(俳号は徳門)をはじめとして島原の揚屋の主人や遊女屋の主人たちと句会を開いたりしました。この島原での俳諧の盛況ぶりは一七七〇(明和七)年の「不夜庵歳旦帖」という新年の配り物の句集に遊女たちの句までもが入っていることからわかります。彼女たちの作品を「不夜庵歳旦帖」から三句抜き出してみます。

紅粉猪口(へにこちよこ)に 移りにけりな

玉椿(たまつばき)

つかさ

遅う来る 人には告げよ 春の宵

賤機(しずはた)

雨もやと しばしとどめん 朝霞

初紫

おそらくは揚屋の座敷での句会であつたかと想像されますが、どれもすこし艶っぽい内容の句です。「移りにけりな」、「人には告げよ」、「しばしとどめん」とどこかで聞いたような言葉が使つてあるのかわいらしい。きっと彼女たちがいたことで句会は大いに盛り上がったことでしょう。

「つかさ」「初紫」といった源氏名はともかく「賤機」が気になります。「しず(倭文)」は古代の織物の一つ。源頼朝の前で静御前が歌つたという「しずのおだまき繰り返し」の「しず」です。「機」は「しず」を織る機械のこと。「賤」と音が通じることから自らを卑称する語を用いたのでしよう。おそらくは三人とも太夫であつたと想像しますが、はつきりわかりません。

また、太祇は遊里島原の活性化プロジェクトでもいうべき仕事もしています。十八世紀半ばとなると祇園に客が移つて島原は寂しくなりますが、去つていった客を呼びもどすためにからくり人形を飾つた灯籠がおかれたり太夫による仮装行列などの年中行事が始められたりしましたが、太祇のアドバイスによるといわれています。太祇は若い時代に江戸の吉原に住んだことがあつたので、そこで見聞きした経験から助言したのでしよう。

う。

三

炭太祇は江戸の生まれであり、元来江戸の俳壇の間で育つて「武玉川(むたまがわ 雑俳集)遊戯的な俳諧文学の総称 炭太祇の師である慶紀逸の撰」風の人事趣味に養われてきました。筆者のような素人目には雑俳と川柳の差がよくわかりませんが「武玉川」には次のような句があります。

- ①二人して長(た)けたる娘を打ち眺め
- ②齒の抜けた 子の屋根を 見て居り
- ③出来秋の 検見のたもとは 面白し

①の句はなかなか結婚しない娘を見てため息をつく両親。②の句は下の乳歯が抜けたのでその歯を屋根に放り投げて見上げる両親。③の句は豊作の村々からにたくさんの賄賂をもらつた検見役(その年の年貢高を決める)のフトコロ具合は面白いほどに重そう。三句ともに川柳の一步手前という所でしょうか。炭太祇はこうした傾向の中で句作りを学んできたのでした。したがって彼には実社会の出来事や人情の複雑味などを題材にすることが多くなりました。

京では蕪村とその周辺の人々と交わる機会が多かったのですが、その俳風が蕪村から強く影響を受けてぶれることはあまりなかったようです。

太祇が得意としたのは人の動きをからませて人間味を織り込んだ句、つまり人事的趣味に立脚して卑俗に流れもしない句です。そうした句を太祇は数多く作っています。たとえば次の句です。

東風(こち)吹くと
語りもぞ行く 主と従者(すき)

「暖かになったはずだ。東風が吹いているじゃないか」と語る主人。「さよう。本当に暖かになりましたことだ」と答える従者。主従二人の会話によつて春風駘蕩たる風情を描こうとしています。江戸期の主従の間には厳然たる身分の差があり、従者が主人に心やすく主人と話すことはめつたにないことでした。その二人が親しく語り合っていきます。それだけでも和やかな気分がもし出されてきます。自然と人事が融和しているような句です。

- この句の特色はやはり会話をそのまま取り入れたことにあるでしょう。こうした手法は太祇の好んだところで他にも
- ④な折りそと 折りてくれけり 園の梅
 - ⑤十三夜 月を見るやと 隣から
 - ⑥寝よといふ 寝覚めの夫(つま)や 小夜砧(さよきぬた)

という句があります。三句とも人間の心の優しさを感じられる句です。こうした

人間味に触れるあたりが大祇の持ち味の
一つでしょう。⑥の「小夜砧」とは夜打
つ砧のこと。砧は布を柔らかくしたりツ
ヤを出したりするのに使う木または台の
ことです。布を柔らかくしようと夜遅く
まで砧を打つ妻に夫が優しく「もう遅い
から寝なさい」と声をかけるといふ趣の
句です。「もう冬が近いから」と答える
妻の音が聞こえてきそうです。もともと

「おい、うるせえな、枕元でトントンや
られちゃ、寝られりやしねえや。早く寝
ろ、てんだ」「何いつてんだよ。あなた
の稼ぎが悪いからやってるんじゃない
か。グダグダぬかすんじゃないわよ」で
は句にはなりません。

それはともかく何かドラマの一場面を
見るような句ですが、蕪村にも

御手討の夫婦(めをと)なりしを 更衣

という句がありますが、太祇の方が年長
ですので先駆をなしたというべきでしょ
うか。そして次のようなロマンチックな
句もあります。

初恋や 灯籠によする 顔と顔

島崎藤村の詩「初恋」を彷彿とさせる句
です。近々に顔を寄せた若い男女。どち
らも恥ずかしげにボツと顔を赤く染めて
いる。それが灯籠のオレンジ色の火の光
を背景にして浮き出ています。古稀近い

筆者には二人をそのままにして、「お邪
魔虫」にならぬよう、そっとその場から
立ち去りたい気分させられます。

もちろん太祇は人事の句だけを作り続
けたわけではありません。旅路の中から
得た次のような句もあります。

山路来て 向(むか)ふ城下や 風の数
⑦ 山路来て 向(むか)ふ城下や 風の数
⑧ 山路来て 向(むか)ふ城下や 夕霞
⑨ 山路来て 向(むか)ふ城下や 旅の宿
⑩ 山路来て 向(むか)ふ城下や ねぶた声

やとと登り着いた峠。眼下には城下の
町が見え、城や多くの人家の上には多く
の風が揚がっている、という情景が⑦の
句ですが、ほっとしてゆったりと眺めや
った趣が言外に感じられます。山路の苦
しさ、峠にたどりついた安心感、城下を
見下ろした爽快感、城下の人家のさま、
入り乱れる風。内容はかなり複雑な情景
ですが、それらをこのように一句にまと
め、統一感を失っていないのは炭太祇の
優れた手並みといつてよいでしょう。

⑧の句は今しがた通ってきた関所を、
ふと振り返ると夕霞の中にもう灯がとも
っている、という句意。作者は深い旅愁
を感じているのです。そして関所の人た
ちの息づかいも感じているのではないで
しょうか。

こうして見てくると⑦から⑩の句は旅
の途次で得た句でしょうが、やはり自然
よりも人事のことに心ひかれる太祇の句

だ、と思わせられます。彼の心は旅の
中でも人を離れない。詮ずる所、彼は人
間に最も親しい詩人であったのです。

炭太祇が一句を得るためにいかに苦心
惨憺したかを蕪村は太祇の死の翌年に刊
行した「太祇句選」の序文に記していま
す。

その記すところによれば、太祇は行住坐
臥、宴飲病床の場にあつても句案を怠ら
ず、仏を拝むにも神に祈るにも発句を成
すというありさまでした。そして一つの
題を得ると句案を十以上を並べて推敲に
推敲を重ね、連句の席上では沈吟するこ
と人に倍したといひます。かの芭蕉がい
った「句もし成らずんば舌頭に千転せよ」
という言葉が文字通りそのまま実行し
たと人といえるでしょう。一句ごとに呻
吟しつつ推敲を重ねた太祇の句を一つ。

行く女 袷(あわせ)着なすや 憎きまで

陰曆四月(初夏です)、更衣をして袷に
なった女の姿。その艶めいた着こなしが
心憎いまでにスッキリとして帯の締め
際、裾のさばきも見事な様子が見えるよ
うです。しかも色つばいところは際とい
ところですり抜けています。太祇の苦心
もそのあたりでしょう。今でも京の町に
は見事に着物を着こなして歩いて行く女

性(若い女性とは限りません)がいて「エ
ッ」と思わず振り返ることが時々ありま
すが、それに近い感覚でしょうか。なお
「袷」を「浴衣」に変えると江戸情緒の
句となります。

この句と同様に太祇が苦心惨憺したと
思われる句をいくつか紹介します。

⑪ 山吹や 葉に花に葉に 花に葉に
⑫ 下り立つと 形定まる 田植えかな
⑬ 掃きけるが 遂には掃かず 落ち葉かな

⑪の句は太祇や蕪村と同時代に生きた名
古屋の加藤暁台の
落ち葉落ち 重なりて雨 雨を打つ
と似た技巧が使われていますが、暁台よ
りもさらに苦心した表現で、山吹が咲き
こぼれそうな美しさを生き生きと表現し
た精巧さは近代の俳句作品といつてもい
いほどです。まさに苦吟の末の名句です。
以下、太祇の人柄のよく出た句を一つ。

⑭ 水瓶(みずがめ)へ鼠の落ちし 夜寒かな
⑮ 美しき 日和になりぬ 雪の上

⑭の句は台所でポチャンという音がす
る。そしてパチャパチャという音。はは
あ、ネズミが水瓶に落ちたな。もう晩秋
で水の音も何だか冷たい。冷え冷えとし
た夜気、男所帯の台所、一人住まいのわ
びしさ、そんなものが目に浮かんで
くるようです。だが、どこかほんのりと

⑮の句は台所でポチャンという音がす
る。そしてパチャパチャという音。はは
あ、ネズミが水瓶に落ちたな。もう晩秋
で水の音も何だか冷たい。冷え冷えとし
た夜気、男所帯の台所、一人住まいのわ
びしさ、そんなものが目に浮かんで
くるようです。だが、どこかほんのりと

⑮の句は台所でポチャンという音がす
る。そしてパチャパチャという音。はは
あ、ネズミが水瓶に落ちたな。もう晩秋
で水の音も何だか冷たい。冷え冷えとし
た夜気、男所帯の台所、一人住まいのわ
びしさ、そんなものが目に浮かんで
くるようです。だが、どこかほんのりと

温かさを感じます、「かわいそうに」と布団の中でネズミの運命に同情している作者の姿に。

⑮の句は雪がやんだ後の快晴のまぶしい輝かしさを表現しています。何でもないような句ですが、「雪の上」という言葉には隙というものが感じられません。筆者の好きな句です。

⑭と⑮の句、ともにわずかですが優しさや柔らかさを感じさせる味わいがあります。そして、いつしか作者への懐かしい気分がこみあげてきます。

五

この太祇と蕪村の付き合いがいつごろ始まったかは、はっきりとしません。江戸の頃からお互いに知っていたのかも知れません。「俳諧古選」(三宅嘯山 一七六三(宝暦十三年刊)によれば太祇も蕪村も最近江戸から上洛した俳人で、その詠みぶりから「江戸之部」に入れておく、とあります。京の俳人たちからはそう見えたのでしょう。太祇の方が早く京の俳人たちと交わって都の風になじんでいたようです。生活のため、蕪村が画業に忙しくしていたせいでしょうか

その蕪村が一七六六(明和三年)六月に三葉社の句会を始めると、太祇は初回から参加し句会のある毎にほとんど欠かさず出席しています。

この炭太祇と蕪村の間で起きた出来事

が書かれた絵と文章とが残されています。「太祇馬提灯図」と題された絵に記された自画像がそれです。以下、「贅」にそつて二人に起きたことをみていきましょう。

師走も押し詰まった十二月二十日ころ。上京のとある所で催された句会に出た二人がようやく帰途についたのは「四更(深夜一時から三時頃)」のこと。折悪しく風雨激しく荒れた天候の夜でした。二人はフンドシ丸見えの「尻からげ」して室町通りを南へと駆けていくうちに、傘はひっくり返り、提灯も消えて、真っ暗がり。途方に暮れた蕪村が

「かかるときには馬提灯というものこそよけれ。」

(こんな時には馬提灯というものがあればよかったのに。

と泣き言をいいます。「馬提灯」とは馬上で腰に差せるようにした提灯で走っても消えません。すると蕪村の嘆きに太祇が反論します

「何、馬鹿なこと云うな。世の中のことは馬鹿なことを言っているのか。世の中のことを馬提灯をもっていたらよかったですか何てことはわかるわけもない」

「なにを馬鹿なことを言っているのか。世の中のことを馬提灯をもっていたらよかったですか何てことはわかるわけもない」

この言葉を聞いて蕪村は気づきます。

「太祇が俳諧の妙、すべて理屈にわたらぬこと、この語の如し」

太祇の句の素晴らしさは「理屈っぽくないところにある」のだ。太祇の句は一般的な「理」ではとても把握しきれず、俳壇での名声を得るよりも俳諧三昧を自樂する彼の性行から出てくる句は自分らの「理」の水平を超えたところにある、と知っているのでしょうか。蕪村が最も信頼を寄せた俳友への最高の讃辞だったかも知れません。

その炭太祇は一七七一(明和八年)八月九日に没しました。それから十二年後の一七八三(天明三年)八月、京の島原にあつた太祇の旧不夜庵で十三回忌の追善句会が開かれました。折り悪しく雨風が激しい中を六十八歳の老いたる蕪村は出かけます。次の文章はその時のことを書いた「追慕辞」です。

太祇居士が十三回追善の俳諧に招かれる日、風雨ことに激しかりければ、かくては道のほどいかにやなど、人のせちにとどめけるを、「蓑傘(みのかさ)もある、とく得させよ」といひののしりて、ことごとしき老いの出で立ちいとおかしく、からうじて不夜庵にいたりぬ。かの登蓮法師(とうれんぼうし)が風流とは品かはりたれど、(か)こ(こ)やし

の誠はなか恥すべきにやと、やがて仏前に向かひて、

線香や ますほのすすき 二三本

「人」とは蕪村の妻の「とも」や娘の「く」をさしていると思われれます。「せちに」は「しきりに」の意。「登蓮法師」は「徒然草 一八八段」に出てくる話で、和歌では「ますほのすすき」といったり「ますほのすすき」といったりして、どちらなのか不明なので、雨の中を知っている人のもとへ急ぎ聞きに行つた法師のこと。「風流とは品かはり」とは登蓮法師は和歌という風流事だが自分は追善事という違いがあるということ。そして「ますほの薄」とは穂の部分が赤みを帯びたススキのことです。「やがて」は「すぐに」の意。「線香や……」は線香の煙が二三本も立ちのぼつて「ますほのすすき」のように揺れているという句意でしょうか。

「こんな雨風がひどいときに行かなくても」と家人が反対するのを押し切つて「蓑や笠の準備を早うせんか」とせかし慌てて飛び出していった老蕪村。今の四条烏丸あたりにあつた自宅から丹波口駅のある島原まで、およそ三キロの道を急いだに違いありません。「線香の一本でも……」と蕪村は亡き友のために何としても句会に参加したかったのでしよう。

この句会から四ヶ月後の十二月二十五

日の未明、しばらく病臥にあった蕪村は亡くなっています。死の間近まで太祇は蕪村にとつてかけがいのない友でありました。

太祇と蕪村の結びつきについてさらにもう一つ。蕪村が六十二歳で書いた「春風馬堤曲」の結びに

君見ずや 古人太祇が句
藪入りの 寝るやひとりの 親の側

とあり、蕪村は太祇の句を用いています。少女が母のもとに帰って安らかに眠った事を暗示するためなら蕪村自身の

藪入りの夢や小豆の煮へる中(うち)

がありますから、それを末尾として用いてもよかつたはずですが、そうはしていません。自作をここに配することには大きなためらいを感じる理由があつたことも考えられますが、太祇の句がいくぶん感傷的でありながらも安定感と深い余情とがあり、何よりも最も信頼する俳友の作品であつたからだということも理由の一つに挙げてよいように思います。

最後に太祇と蕪村の類似した発想の句を対比してみます。どちらをよしとするかは好み次第です。

初恋や灯籠に寄する顔と顔 太祇
燃え立てて顔恥ずかしき蚊やり哉 蕪村

東風吹くと語りもぞ行く主と従 太祇
春雨やものがたりゆく蓑と笠 蕪村

行き行きて心おくる枯れ野かな 太祇
行き行きて心ゆくゆく夏野かな 蕪村

医師へ行く子の美しき頭巾かな 太祇
すがめなる医師わびしき頭巾かな 蕪村

立つ波に足みせて行く千鳥かな 太祇
磯ちどり足をぬらして遊びけり 蕪村

どちらがどちらに影響したかはよく分かりませんが、二人の微妙な違いが面白いです。

【補足】

1 炭太祇についてあともう少し

炭太祇が居を島原の地に移したのは一七五四(宝暦四)年のこと。一七五五(宝暦五)年に出された京の俳人風雲齋風状の「徐元集」には「梅に題す 洛西不夜城」として吞獅以下の島原の妓楼関係者の句が並んでおり、そのすぐ前に

歳暮 鬼の豆 あほうにつける 葉かな

の一句が収められているが、その前年に出された風状の「徐元集」には島原の不

夜城連(妓楼主人たちの集団)の出句があるのに太祇の句は見当たらないことからこのことはあきらかであろう。

吞獅は妓楼桔梗屋の主人であり、豪奢を極めた大阪の遊里新町の茨木屋幸齋の孫である。吞獅の父も俳号は吞鯨といい、この父の影響で吞獅も俳諧を好むようになったらしく、春に出す春興帳に自家にかかえている遊女たちの句までも掲げるのは例年のことになっていたらしい。本文中にもあるとおり、こうした句集に京の俳人からも出句していたのは当時の俳諧の盛んであつた様子を伝えて興味深い。

蛇足ながら遊女たちと句作りを楽しみ、できあがつた作品を句集にまとめることは京の島原だけで行われていたわけではない。江戸の吉原でも行われていたことであつた。たとえば吉原にある茶屋、松屋仁右衛門(俳号は花礫)の家で句会を催したとき吉原の遊女たちが多数その連衆(れんじゅ) 句会の参加者(こと)として参加していたことは太祇の「都のつと夏秋」に書かれている。

その太祇の人柄について京都町奉行の与力であつた神沢杜口の「翁草」にももしろい記述がある。そこには

太祇は俳諧も人もやはらかなり。常に酩酊す。坊主にて、衣類に大なる紋を付ける。我にも「穴賢(あなかしこ)」紋(仏教関係者の付ける紋と思われ)を付け給へと勸む。役者付き合いが好きに

て、誰々ともみな懇(ねむ)ころなり。

とあり、ここからも太祇が温和な性格であり、酒と芝居が大好きな都会人風な人であつたということが察せられよう。相手が妓楼の主人、遊女、役者、気むずかしい漢学者・文化人、誰であろうと親しげに付き合えた人であつたと杜口は書いている。一度でも飲酒の場に同席すれば蕪村ならずとも楽しい酒が飲み合え、旧知の友のようにふるまえた人であつたに違いない。

2 蕪村の句「すがめなる……」について

本文中で示した蕪村の句

すがめ 眇なる 医師わびしき 頭巾哉

について面白い解釈があるので紹介しておきたい。季語は「頭巾」で冬。「眇」とは片方の目が斜視であるの意。

頭巾から眇をのぞかせていた医師。「わびしい」をどうとらえるか、が問題である。冬空にもめげることなく往診のため歩き続ける眇の老医師、その姿が「わびしい」とみるのが一般的な解釈であろう。いやいや、この「わびしい」はこんな医師に診てもらふ病人の「大丈夫やろうか」という不安な気持ちを述べた句なのだとする解釈もある。

いろいろな解釈がある中で「頭巾」に注目したのが尾形仍氏。この解釈によればこの頭巾は「気まま頭巾」というものとなる。それは江戸の中期ごろからはやった頭巾で鼻や口に布切れを垂れて面部を覆い芽ばかりを出す頭巾、つまり、時代劇で偉そうな武士がよくかぶっているあの頭巾のことである。江戸時代の風俗に詳しい「守貞漫語」によれば「遊里に通ふ若き医者などかむりて悦ぶなり。まづ法度破りの馬鹿者なり。」とあって、老医師の頭巾という解釈とは大きく違ってくるのだ。

この蕪村の句と同日につくられた連衆の作に

頭巾着て いささか化けし 心かな

百池

夜の袖 引く人の知れぬ 頭巾哉

自笑

などと頭巾がもたらす遊びの気分が漂う句がある。また蕪村自身にも同じときに詠んだ別の句

私語 頭巾にかづく 羽織かな

があり、男女二人が頭巾がわりに一つの羽織を頭にかけてささやきながら道行く姿を詠んでいる。これらの句からするとどうも頭巾は忍び歩きの道具であったらしい。

以上から尾形氏は以下のように結論する。蕪村の「眇なる」の句は老医師のわびしさを詠んだのではなく、若い遊び盛

りの医師が遊里に通うのに医師の坊主頭を隠すため世間で流行の気まま頭巾をかぶったものの、眇の目だけは露出していてどうにもパツとせずガツクリという笑えない笑いのおかしさを詠んだ句となる。

とすれば、この句は世の中と人のあらゆる事柄に食欲な好奇の目を光らせ、才気あふるる言葉の魔術にのせて笑いと悲しみが織りなしていく人生の真実を突きつける蕪村の魅力がつまった作品だといえる。この句が蕪村の自信作というのもむべなるかなである。

隠された歴史(26)

満田正賢

今回は九州王朝の変遷を考古学的に考察します。その前にお断りしなければならぬことがあります。

私はこの「隠された歴史」の連載を始める前に、「邪馬台国と火の国」を補足も含めて七回連載しました。その内容を簡単に紹介すると「魏志倭人伝に記された帯方郡の使者は火(肥)の国を訪問した。末盧国は唐津付近、奴国は吉野ヶ里、投

馬国は現在の長崎県、狗奴国は現在の熊本県球磨地方、そして邪馬台(壹)国は

現在の熊本県(肥後地方)全体であって、その中に女王之都から奴国までの二十一カ国が含まれていた。そして女王之都は狗奴国の北にあり火の君がいたとされる八代地方である」という説です。しかし、この説は半分正しいが半分は間違っているという考え方に変わりました。その理由は三つあります。

第一の理由は、唐津は有名な菜畑遺跡など弥生時代すでに開かれた土地であり、「草木茂り魚を好んで捕る」と記された末盧国のイメージに合わないということです。又魏志倭人伝の末盧国の記述に「官」と「副」の名前の紹介がないことから、魏の使者は末盧国の中心地には行かなかった可能性が強いと考えました。私は昨年現地を訪問して、末盧国は東松浦半島先端の呼子付近ではないかと想定を変えました。それによって末盧国の東南五百里にある伊都国が糸島半島の付け根付近に存在しうることになりました。

第二の理由は、私は火の国が先に西北九州に建国されその後朝鮮半島の勢力が火の国の領土に侵攻し筑紫国を建てたと考察しましたが、魏志倭人伝には倭国が乱れた後卑弥呼がその乱を治めたと記されています。すなわち帯方郡の使者が来た時代には火の国と筑紫国の抗争は収まっていたと思われることです。古田武彦氏は、卑弥呼は「ひみか」と読み、筑後風土記に出てくる「甕依(みかより)姫」ではないかと推定しています(古代は輝

いていたI)朝日新聞社)。筑後風土記には甕依姫が「筑紫の君」や「肥の君」の共通の「祖」であり、共通の「祝(はぶり)」として両国の堺にいる甕猛神(あらぶるかみ)を収めたとするされています。私もこの古田氏の推定が正しいと考えるようになりました。

第三の理由は、これが私の説を変えた最も主要な理由なのですが、糸島半島にある平原遺跡や博多駅の南側に広がる比恵・那珂遺跡の存在を無視して三世紀の日本の姿は語れないと考えたからです。その内容については後述します。

一方、「邪馬台国と火の国」の中で考察した内容が半分正しいと考える理由は、「女王之都」を「女王が都としていた所」と過去形で捉えれば、不弥国以降の各国の考察が妥当性を持つからです。火の国と筑紫国の抗争を収めるために火の国の女王が筑紫国に移り両国の共通の女王として君臨したと考えれば過去形で記した理由も説明がきます。正始八年(二四七)に倭国に派遣された塞曹掾史張政は

狗奴国との抗争を支援することを目的としています。当然狗奴国と接する地域に出向いた。そしてそれは狗奴国の北に接する女王卑弥呼の出身地であった。張政は水行して抗争地域に行き、陸行で邪馬壹国の中にある二一カ国に立ち寄りながら倭国の中心地であった奴国に戻ってきつつまが合います。

さて、九州王朝の考古学的考察に入り
ますが、私が想定しているものは一元的
に繋がっているものではありません。九
州王朝とは筑紫を舞台にしたいくつかの
断続した王朝の総体の名称であると私は
考えています。そこは古田武彦氏と異な
る点です。

後漢書に記された、金印を授けられ五
○年後に生口百六十人を献上した倭国王
帥升の国、魏志倭人伝に記された女王卑
弥呼・耆与の国、宋書等に記された倭の
五王の国、これらはいずれも筑紫の中
違う地域を拠点にしていた勢力であつた
と考えてその遺跡を探るべきです。倭の
五王は継体に侵略された筑紫の君磐井に
直接繋がっていると考えられますが、私
は継体・安閑・宣化の後、宣化の子が那
津官家に遷都し後期九州王朝を建てたと
想定しており、ここでも遺跡としての断
絶が生じます。これらの別々の地域の遺
跡が総体としての九州王朝を考古学的に
証明しているという想定で考察を進めま
す。

まず、二〇一八年十二月二十二・二十
三日に大阪歴史博物館で開催された「古
墳時代における都市化の実証的比較研究
―大坂上町台地・博多湾岸・奈良盆地―
」というシンポジウムの内容をご紹介しま
す。このシンポジウムは十一人のパネラ
ーが二日間にわたって三地域における都
市化の研究結果を報告したもので、私も
古田史学の会のメンバーに誘われて二日

間フルで参加しました。報告者は場所柄
大阪上町台地関係が五名、博多湾岸関係
が二名、奈良盆地関係が二名、その他二
名という構成でした。シンポジウムの結
論を私なりにまとめると「大坂上
町台地と博多湾沿岸では古墳時代に都市
化が進んでいたが、奈良盆地では都市化
が進んでいなかった。」ということでした。
さらに私が注目したのは、「博多湾岸では
弥生時代にすでに初期都市と呼べるもの
が出来上がっていた。」という久住猛雄氏
の発表でした。久住氏の発表の一部をこ
紹介します。

『比恵・那珂遺跡群は福岡平野のほぼ
中央に位置し、東を御笠川、西を那珂川
によって画された標高五〜十一mの中心
段丘上に立地する、南北約二・四km、
東西約〇・六〜一・〇kmの範囲に広が
る広大な複合遺跡群である。(中略)「都
市化」の萌芽はすでに弥生中期後半(※
紀元前一世紀)にあり、それがそのまま
進行して、少なくとも弥生終末期(畿内
の庄内式併行期)(※三世紀前半)には推
定延長二kmのメインストリートの造営
とそれを基軸とする「都市計画」を伴う
「初期都市」として成立する。(中略)こ
のような比恵・那珂遺跡の「初期都市」
といえる様相は、古墳前期前半(※三世
紀後半〜四世紀初)までであり、前期中
頃以降には急速に衰退し、首長居館と目
される「二号環溝」周辺は「居館域」と
して前期末まで維持されるが、古墳中期

初頭(※四世紀末)には全域で遺構分布
が激減してしまう。』(※は満田が追記)
卑弥呼が魏に朝貢した年(二三八年)
は比恵・那珂遺跡群の完成期です。比恵・
那珂遺跡群は魏志倭人伝に記された奴国
の、そして女王卑弥呼が統治した倭国(筑
紫国・火の国)全体の中心地であつたと
推定出来ます。そしてそれが古墳前期に
衰退したのは、倭国の政権が「倭の五王」
という、違う地域に拠点を持つ別の勢力
によって取って代わられたことを表して
いると考えます。ちなみに、二〇一九年
六月十六日に古田史学の会主宰の講演会
でこのシンポジウムの内容を「日本列島
における五〜六世紀の都市化―大阪上町
台地・博多湾岸・奈良盆地」というテー
マで講演された大阪文化財協会事務局長
の南秀雄氏に、私が「比恵・那珂遺跡の
三世紀での都市化をどう考えますか」と
質問したのですが、南氏の答えは「比恵・
那珂遺跡については三世紀の都市化とい
うのは信じられない話なので、自分が信
じられる六世紀の都市化について話をし
た。」ということでした。

れます。

次に糸島半島の付け根にある平原遺跡
について紹介します。私が昨年平原遺跡
を訪問した時に驚いたのは、出土した漢
式鏡の大きさでした。私は「隠された歴
史(六)」で三角縁神獸鏡に関する考察を
行いました。三角縁神獸鏡の特徴をもと
に得られた結論は「三角縁神獸鏡は、日
本に亡命した遼東公孫氏の工人が、日本
の保護者の要請を受けて日本で製作した
鏡である。遼東公孫氏の工人を受け入れ
た保護者のいた地域は、遼東公孫氏を滅
ぼした魏にいち早く使者を送った女王卑
弥呼の国とは違う地域である」というこ
とでした。

「三角縁神獸鏡は魏が卑弥呼に下賜し
た鏡ではない」という見解にはいくつ
理由があります。①三角縁神獸鏡は中国
で全く出土されない。②日本で発見され
た三角縁神獸鏡の枚数は、卑弥呼が魏よ
り贈られた銅鏡百枚をはるかに超える③
古墳から鏡が出土するとき、多くの場合
棺の中の頭の部分には漢式鏡が置かれて
おり、三角縁神獸鏡は棺の外に埋められ
ている。三角縁神獸鏡は決して貴重な鏡
として大切に取扱いされていない。④魏
の王朝が卑弥呼に与えたのは漢式鏡と考
えるほうが妥当である。ということでは
と。ところで中国で出土される鏡の大半は面
径一〇センチ程度のものです。三角縁神
獸鏡はそれよりの大きく二〇センチを超
えるものもあります。平原遺跡一号墓か

ら出土した漢式鏡は三九面あり、その多くは一五〜二〇センチの直径のものですが、その中に日本最大の直径四六・五センチの内行花文八葉鏡が四面含まれていません。(但しこの鏡は国産鏡であろうと想定されています。)平原遺跡を発掘した原田大六氏は、「この『内行花文八葉鏡』の直径四六・五センチメートルとは、漢の時代の寸法でいうと二尺となる。咫(あた)は〇・八尺であり、直径一尺の円周が四咫(〇・八×四＝三・二)となることから、この鏡の円周は八咫であるといえる。伊勢神宮の(こ)神体である八咫鏡(やたのかがみ)は元々この鏡と同型の鏡ではなかったか。」という見解を述べています。

平原遺跡一号墓は副葬品の多くが勾玉や管玉、耳瑠(耳飾り)などの装身具であり、埋葬者が女性であった可能性が高いとみられています。原田氏はこの埋葬者を記紀に出てくる玉依姫と考えているようですが、埋葬地から考えると伊都国にいた女王であることは間違いなく、倭国(筑紫国・火の国)の女王として伊都国にいた卑弥呼又は耆与の可能性もあるのではないかと思われる。

時代は前後しますが、博多湾先端の志賀島で出土したとされる「漢倭奴国王」の金印が、後漢書に出てくる金印を授けられた国の場所を指し示していることについては、あまり異論がないと思います。一つだけ付け加えますと「漢倭奴国王」

を「かんのわのなのこくおう」と呼ぶのは疑問です。漢が、朝貢してきた蕃国の更にその中の国の王に金印を授けた例はありません。漢は西方の蕃国「匈奴」を「匈奴」と呼んでいます。東方の蕃国である「倭」を同じように「倭奴」と呼んだ可能性は高いと思われます。「漢倭奴国王」は「かんのわど(ゐと)こくおう」と呼ぶのが正しいと思われる。そうであれば博多湾岸が当時の倭国そのものの中心地であったということに納得できます。

以上、後漢書に記された金印を授けられた倭国王帥升の国と魏志倭人伝に記された女王卑弥呼の国が博多湾岸にあったことに関して、私が見聞きし実際に確信したことを述べてきました。邪馬台国九州説は、魏志倭人伝に出てくる「矛」や「鉄」が北部九州に集中的に出土すること、魏から下賜された「絹」や卑弥呼や耆与が献上した「錦」の出土も北部九州に集中していること、耆与が献上した大型の勾玉の鑄型が福岡県春日市で発掘されていること(茨木市の東奈良遺跡で出土した鑄型は小型のものである)、など多くの考古学的事実に裏付けされています。邪馬台国九州説の考古学的検証については古田武彦氏が「古代は輝いていたI」などの多くの著書で詳しく述べています。又考古学者の中でも森浩一氏など多くの著書を出していますので興味のある方はぜひともお読みください。

倭の五王とそれに続く筑紫君磐井の時代は政治の舞台が筑後の久留米周辺に移ります。そして継体が起こした侵略(磐井の乱)によって前期九州王朝が滅ぼされ、継体・安閑・宣化の後、宣化の子が建てた後期九州王朝によって政治の舞台は博多湾岸に戻ってきます。次回はその時代の考古学的考察をおこなっていきたいと思います。

「道をゆく」(20)

成瀬和之

「熊野街道」(七)

JR和泉府中駅から東へ行き、府道を渡った所に泉井上神社があります。現在のこの神社の境内に熊野社として井ノ口王子は祀られています。大鳥・穴師・聖・積川・日根野神社も祀り、通称「和泉大社」と呼ばれています。ここでも、祭神に「神功皇后」が加わっています。本殿右の玉垣の中に和泉という国名発祥の源となった清水(国府清水、大阪府指定史跡)があります。

この神社の東側を熊野街道は南北に通っており、道の東側に少し入ったところに和泉国府跡の石碑の立っている御館山公園があります。和泉地名の由来、和泉

国創設の由来などが書かれた石の説明板が建てられています。

そこから熊野街道を南西に進み、府道大阪和泉泉南線と合流すると、柳田橋に出ます。橋の少し手前の府道沿いに子宝地藏を祀る妙福寺があり、そこに井ノ口王子址の石碑が建っています。

次の池田王子跡は、JR阪和線久米田駅の北側の踏切を西側へ渡り、少し先を左に折れた辺りとされますが、特定できません。池田王子跡の説明板が金網のフェンスにあります。森のようで王子のあった雰囲気は残っています。池田王子は積川王子とも呼ばれ積川神社とも関係があるようです。

JR久米田駅から南に一五分ほど歩いたところに久米田寺があります。竜臥山と号し、本尊は釈迦如来です。行基建立の寺で、久米田池を維持管理するための隆池院が始まりです。

久米田寺から北西に進むと久米田古墳群、久米田古戦場があり、久米田池とともに近所の人々の散歩コースになっています。

さらに北へ進み、JR阪和線沿いの府道に戻ったところに積川神社鳥居があります。神社は移転していますが、白河上皇筆と伝えられる「正一位積川大明神」の扁額をかかげています。この扁額は模写したもので、実物は約5キロメートル東の積川神社にあり、府文化財になっています。

JR下松駅を経て作才(さくさい)町の交差点を南側に入ったところに「恋ざめの淵」、さらに南に進み、薬局を左に入ったところに「恋の淵」があります。いづれも平安時代の女性歌人和泉式部に関する伝説の地です。小倉百人一首に和泉式部の歌があります。

「あらざらむ この世のほかの

思い出に いま一度の逢ふこともがな」

(そうながく生きてはいないだらう

この世なので、あの世での思い出

になるように、せめてあなたにもう

一度逢いたい)です。

恋多き式部が「恋の淵」で顔を洗うと思いを寄せる男性との恋が成就し、「恋ざめの淵」で顔を洗うと恋が冷めた、という伝説です。夫の浮気や息子の女狂いに泣く親が「恋ざめの淵」に祈り、汲んだ水を飲ませるために持ち帰ったと言います。

このように熊野街道沿いに和泉式部にまつわる伝説がいくつも残されています。ところが、和泉式部に関する伝説は岸和田だけでなく日本全国各地に残されており、遠く離れた地に伝わった伝説なのに、よく似た話があったりします。民俗学を提唱した柳田邦男は全国に残る、このような和泉式部伝説を集め、これらは中世以後に、熊野比丘尼(びくに)や瞽女(こぜ)など、各地を渡り歩く女性芸能民が語り広めた伝説と考えました(『定本柳田邦男集』第八巻)。熊野比丘尼は那智熊

野参詣曼茶羅(まんだら)という聖地案内図を携えて、中世に全国を行脚し、庶民に熊野信仰の普及と勧進(募金活動)を図った尼さんです。瞽女は三味線を弾き語る目の見えない女性芸能民です。

熊野街道周辺に多い和泉式部伝説は、熊野比丘尼の影響と思われませんが、確かなことはわかりません。伝説は歴史上の事実とは言えないことも多く、だから伝説と言われるのですが、それが語り継がれ、現在まで伝えられてきたという事実には重いものがあります。恋に悩み、恋に苦しんだ人々が大勢いたったことなのでしょう。

編集後記

SK生

▼新型コロナの感染者が冬を迎えて急増している。あちこちで医療崩壊という声もあがっている。病気は弱気から、といわれても感染するのはやはりこわい。古稀間近の身となればなおさらそうだ。国民に対してしかとした目標を示せぬ政府を頭に戴いている現状では「出たがりません。疫病にかつまでは」と我々は精神で行くしかないのか。そう考えるといささか情けない。精神論で勝てる相手ではないのだ、新型コロナは。

▼「古稀」といえば、最近「茶寿」という言葉を知った。卒寿が九十歳、そして白寿が九十九歳の祝いとは知っていたが、「茶寿」が百八歳の祝いと知らなかった。知ったのは今年六月に百三歳で亡くなった俳人後藤比奈夫さんの句によってである。

・春山の見ゆるごとくに茶寿そこに

百八歳まで生き抜くぞという力強さを感じる句である。「元氣を出せよ、まだ若いんだから」と遙か高齢の先輩から激励されているようだ。とはいえ百八歳はずつと彼方の世界。そこまで行き着けるかといえは、正直心もとない。

▼「大だつて権力を持つてば人を従わせる」という言葉がある。シェイクスピアの「リア王」第四幕第五場の中のセリフだ。その近くには「(ガウンで隠した)罪も金でメッキすりや、正義の強い槍も突けずに折れてしまふ」というセリフもある。いたるところに当局の密偵がいた時代だが、こんなセリフを堂々と人前で話しても、その作者は捕まることはなかった。なぜなら、これは狂気のリアのセリフだからである。新自由主義の経済政策によってずっと続いてきた貧困化の流れに、さらにコロナ禍も加わって国民があえいでいるときに国会をさっさと閉じて、しかも国民に対して何の訴えもしないのであれ

ば犬でも為政者になれようし、賄賂にからむ政治家の話はうんざりするほどある。自分が茶寿になったときでもまだこのようなことが続いているのだろうか。本当ににめまいがしそうでである。

▼歌人の穂村弘さんが雑誌「ダ・ヴィンチ」で投稿企画「短歌をください」をしている。そこに寄せられたというクリスマスの歌がステキだった。作者は十七歳の少女だという。

午前二時 裸で便座を 感じてる

明日イエスは 2010歳

一読ギョツとされた方はいなかったらうか。よく考えれば便座にすわれば人のお尻は皆スッポンポンの裸である。それにしてもこの何の邪気も感じさせぬ明るさはどうであろう。はじける若さがまぶしいほどだ。先ほど述べた暗い気分などはパツと吹き飛ばしてくれそうである。この明るさが未来にもかくあつてほしいと願うが、「天下の興亡、匹夫にも責あり」という先賢の言葉が初老の我が耳には痛い。

学問の自由はこれを保障する

日本国憲法に、「第三条 学問の自由は、これを保障する。」とある。これは五七五の川柳ではないか、と私に思えてきたのは、菅首相が「見直すつもりはない」と断言する学術会議会員六名の任命拒否問題を考えている時であった。

日本国憲法にある五七五

思わず、こんな駄句も浮んだ。ぶくぶくぶくと生きているリズムも、こうして五七五になってしまふのだ。

学問を儲けの種としか考えない風潮は人の世に常にあった。それが強まりこそすれ弱まることは当面ないだろうとは思っていた。しかし、二十一世紀の日本で、まさかこれほど時代錯誤な、学問を政治のしもべとする企てを政府がするとは夢想だにもしなかった。いたるところ、いたるレベルで、「何でもあり」の風潮が広まって久しいが、菅首相の対応はそれをはるかに超えた、真剣そのものの確信犯の行動である。大小さまざま、人文科学・社会科学・自然科学・教育芸術文化など、数百の学会をはじめとする諸団体諸グループが批判の声を上げた。世界の反響も大きい。以下は、国際学術会議が日本学術会議に送った書簡の全文である（日本学術会議による仮訳。十一月二十六日付の「配布資料4」による）。

梶田隆章教授 日本学術会議会長

○：高村ゆかり教授 日本学術会議副会長（国際活動担当）

パリ二〇二〇年十一月十七日

梶田隆章教授

件名：日本学術会議の総会への六人の学者の任命を承認しないとの日本の内閣総理大臣の決定に関する懸念

国際学術会議（ISC）は、菅義偉内閣総理大臣が日本学術会議の総会への六人の学者の任命を拒否したとの報道以来、日本の動向を注視しています。

私たちは、この決定が透明性を欠いていることについて日本学術会議が表明している懸念に留意し、このことが日本における学問の自由と与える影響をきわめて深刻に捉えています。

ISCは、日本学術会議がISCに加盟しており、その結果、国際的な交流と連携を通じた学術の発展を促進するためのコミュニケーションの拡大と緊密な協力の機会がもたらされていることを大変高く評価しています。

二十一世紀の世界が直面する最も緊急の問題のいくつかに対して、最先端の科学を推進することによって効果的かつ公平な解決策を確保しようというビジョンを共有し、自由で責任ある学術の実践こそが学術の進歩並びに人間の福利及び環境の健全性にとって不可欠であるという価値観を共有する私たちは、日本における最高の独立した学術機関の推薦が管内

閣総理大臣に認められなかったことを懸念しております。最も重要なことは、学術に関わる諸決定（学術活動の優先順位や範囲に関するものを含む）は、国際的な学術コミュニケーションで受け入れられている学術の誠実さに求められる条件（scientific integrity constraints）にしたがって行われるものであり、それが、政治的な統制や圧力の対象となってはならないということです。

国際学術会議は、自由で責任ある学術の実践を提唱しており、それには以下のことが含まれます。

- ・学術の進歩並びに人間の福利及び環境の健全性にとって不可欠なものとしての自由で責任のある学術の実践。

このような実践には、そのすべての側面において、科学者の移動の自由、結社の自由、表現の自由及びコミュニケーションの自由、並びにデータや情報への公平なアクセスの保障が必要です。

・あらゆるレベルにおいて、学術研究を誠実に遂行し伝達する責任。

したがって、世界の学術を代表するものとして、ISCが、学術の最高議決機関のメンバーを推薦する際の学術上の選択の自由を擁護し、確保することに取り組み日本学術会議に強力な支援を提供することが適切だと考えています。

本件について前向きな解決がなされることを期待しております。

教授ダヤ・レディー 国際学術会議会

長

国際学術会議・学術における自由と責任に関する委員会議長

南アフリカ計算力学研究会長 ケープタウン大学 数学および応用数学部

俳句

土田 裕

手締めなき西の市より香具師帰る
世間とはかわりもなく浮寝鳥
開戦日地を柔らかく鳩歩む
数え日の籠もりて何もせぬ一日
コロナ禍の終わりが見えぬ年の暮

影山 武司

立冬や垂直線の摩天楼
階に風の纏れて冬に入る
柏手に力の入る神無月
ふくらみを抱く妊婦や冬ぬくし
隠国の泊瀬の山の冬紅葉
五重塔抱きしめるごと山眠る
観音の御足を照らす冬日かな
黒髪の若き比丘尼や実南天
寒晴や鴟尾の金色眼射る
森閑と寒気満ちくる大仏殿